

### III 論考

#### 1 後期旧石器時代から弥生時代における宍道湖・中海周辺地域の遺跡分布と変遷

会下和宏（島根大学総合博物館）・高安克己（島根大学名誉教授）

##### （1）はじめに

宍道湖・中海周辺地域では、完新世（後氷期）の海面変動に伴って、大きく地形が変遷しており、これまでにその具体的復元が進められてきた（山田・高安 2007、高安 2019 など）。こうした古地形ないしは古環境変遷に適応して人類活動がどのように展開していったのかを考察する基礎的作業として、小稿では、各時代・時期における遺跡分布とその通時的な変遷について概略を整理しておきたい。さらに、こうした遺跡立地や変遷の背景についても、上記の環境に対する適応という視点から若干の言及をしておく。

##### （2）各時期の古地形と遺跡分布

ここでは、宍道湖・中海周辺地域における古地形変遷に対応して遺跡分布がどのような動きを見せるのかについて俯瞰する。なお、古地形の復元図、古環境の記述は、主に高安 2019 から引用している。各時期の絶対年代については、小林 2008 を参照した。遺跡の検索にあたっては、平成 15 年度に島根大学地域貢献推進協議会が構築し、その後、島根大学総合博物館が継続してデータ登録を進めている「島根県遺跡データベース」（<https://iseki.shimane-u.ac.jp/index.html>）で公開、会下 2006）を参照した。

##### ①後期旧石器～縄文草創期：約 35,000 年前～B C 9,600（図 8 - 1）

約 11,700 年前以降、完新世（後氷期）にはいると温暖化によって海面が急激に上昇していく。現在の宍道湖・中海部分は谷地形となっており、それぞれ古宍道川・古中海川が流れていた。海面上昇によって、河口部から海水が流入し、谷部への海進が始まっていく。

この時期の遺跡は、松江市橋南地区（現在の大橋川以南）・同玉湯町で多く確認されている。この地域は、松江市玉湯町の花仙山など、瑪瑙（玉髓）産出地に近いことから、石器石材獲得のうえで有利な場所に遺跡が残された可能性がある。また、現在は水没してしまっているが、当時は谷部だった現在の宍道湖・中海内にも遺跡が残されている可能性は十分に考えられる。

##### ②縄文早期：約 B C 9,500 ～ B C 5,000（図 8 - 2）

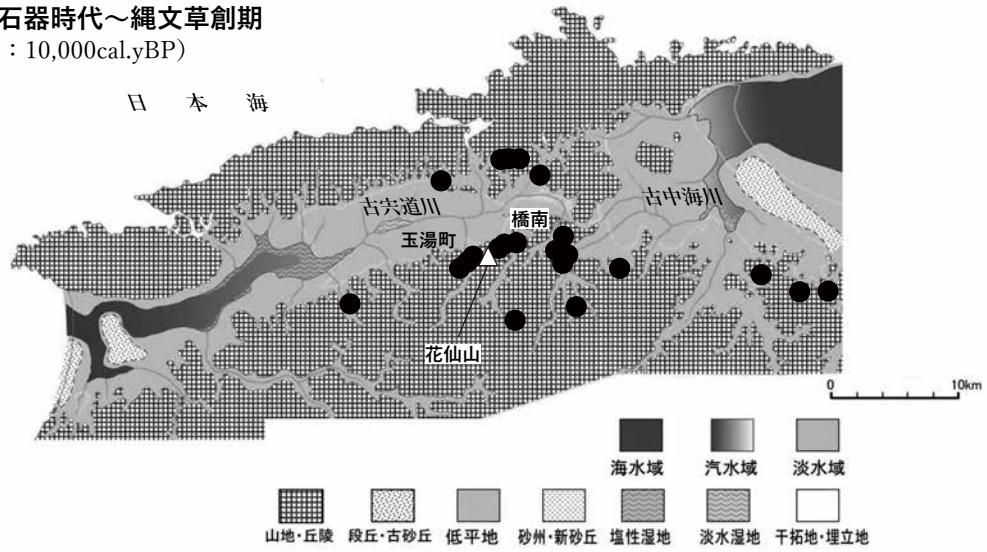
完新世（後氷期）の温暖化によって海面がさらに上昇していった結果、古宍道湾および古中海湾が形成される。

特に縄文早期後葉の菱根式の段階から、これらの内湾沿岸部などに分散的に遺跡が分布するようになる。縄文早期後葉より早い時期の遺跡としては、朝酌川流域の松江市西川津遺跡があげられ、平成 18・19 年度調査 C 区において、縄文早期前葉から中葉の神宮寺式から黄島式の土器が出土している（内田・稲田 2011）。なお、出土した黄島式土器の <sup>14</sup>C 年代測定結果は、B C 7,575 ～ B C 7,480 年および B C 7,595 ～ B C 7,540 年と報告されている（内田・稲田ほか 2011：p.49）。こうした縄文早期前葉から中葉以前に営まれたもので、縄文海進の過程で水没してしまった遺跡は、後期旧石器時代の遺跡と同様に他にも存在する可能性がある。

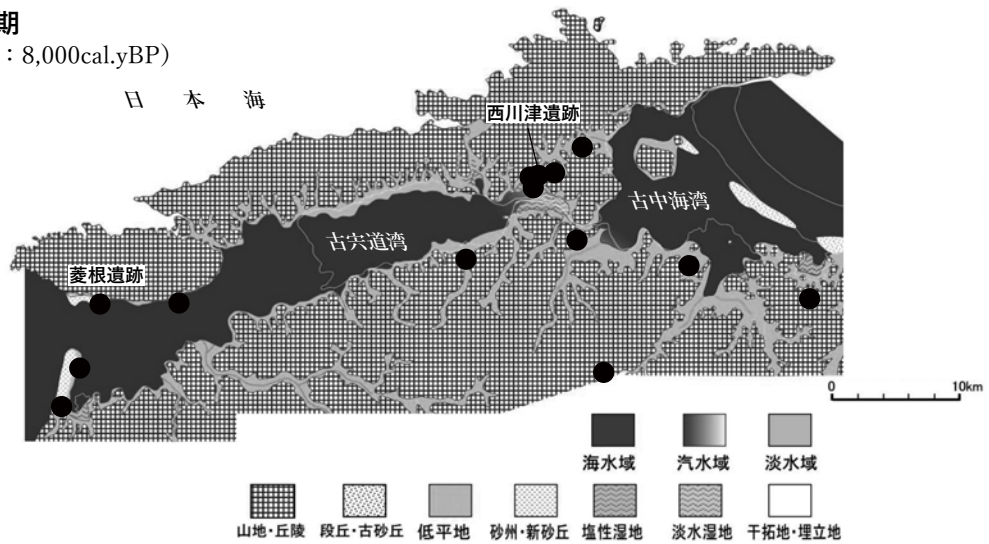
なお、約 7,700 年前、縄文早期後葉頃には、古宍道湾と古中海湾の間は、現在の大橋川に相当する水道が開通する。

##### ③縄文前期：約 B C 5,000 ～ B C 3,500（図 8 - 3）

1. 後期旧石器時代～縄文草創期  
(古地形：10,000cal.yBP)



2. 縄文早期  
(古地形：8,000cal.yBP)



3. 縄文前期  
(古地形：6,000cal.yBP)

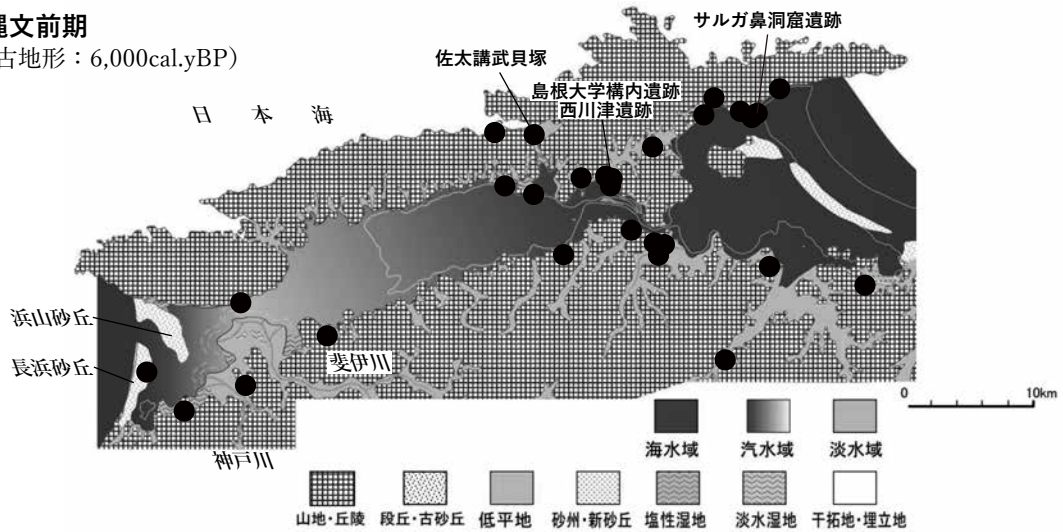


図8 遺跡分布図（後期旧石器・縄文早期・前期）  
地形復元図は高安 2019 を一部改変

相対的な海面上昇がピークに達し、縄文中期にかけて停滞する。海岸線はさらに内陸まで進入し、沿岸では樹枝状のおぼれ谷が形成された。一方、現在の出雲平野部分は、斐伊川・神戸川による堆積活動によって、河口部のデルタが前進したほか、浜山砂丘や出雲長浜砂丘が発達する。また、約7,300年前、縄文前期初頭頃には、この地域にもアカホヤ火山灰(K-Ah)の降下があり、松江市島根大学構内遺跡(島根大学松江キャンパス)などの古宍道湾沿岸部では、明確な帯状の堆積が認められている(会下・中村ほか1997など)。

遺跡分布をみると、古宍道湾北東沿岸・古中海湾南西沿岸・古中海湾北沿岸などで縄文前期初頭から前葉頃の遺跡が増加するが、島根半島日本海側では、松江市鹿島町でわずかに認められるにすぎない。これは、冬季の強い北西季節風を回避したためと思われる。

アカホヤ火山灰降下時の松江市島根大学構内遺跡は、水深3m程度の遠浅でシルト底の入り江がひろがり、小河川が流れ込む環境だった。北方の山地には極相林である照葉樹林が、沿岸の丘陵にはコナラ林などが繁茂していた。島根大学構内遺跡や隣接する西川津遺跡は、こうした多様な環境を包摂した遷移帯に立地していることから、できるだけ多種多様な食料をテリトリー内から獲得しようとする縄文人の多角的な生業戦略を窺うことができる(会下2010)。

表8は、宍道湖・中海周辺地域にある縄文時代の遺跡から出土した動物遺存体である。大半は、縄文人の食物残滓と考えられる。ニホンシカ・イノシシが普遍的で、貝類・魚類では、汽水性のヤマトシジミのほか、海水性で岩礁域に生息するサザエ・アワビ・イシダイ・コブダイなどもみられることから、島根半島日本海側などの外海も食料獲得のテリトリーになっていたことが分かる。

#### ④縄文中期：約BC 3,500～BC 2,500(図9-1)

遺跡の分布状況は、縄文前期とそれ程変化していない。この時期も島根半島日本海側では遺跡が少ないものの、松江市北浦松ノ木遺跡、松江市白畑遺跡、出雲市猪目洞窟遺跡などでわずかに認められることができる。北浦松ノ木遺跡からは、アザラシ上科・タイ科・ベラ科・マグロ属などの日本海に由来する動物遺存体が出土しており、こうした遺跡を営んだ集団は、立地からみても日本海での漁撈・狩猟活動を生業基盤の一つにしていたと考えられる。

#### ⑤縄文後期：約BC 2,500～BC 1,300(図9-2)

斐伊川・神戸川による堆積活動によってさらに出雲平野が発達する。斐伊川デルタは、対岸の島根半島側に到達し、古宍道湾入口部は完全に閉塞され、古宍道湖となる。また、古宍道湾の残存である『出雲国風土記』に記述された「神門水海」は、この時期、海面低下<sup>(1)</sup>が関与してか一時的に淡水化したと考えられている。古宍道湖や古中海の沿岸部に形成されていた遠浅だった大小の入江は、海面低下、河川の沖積作用、水成層の堆積によって低湿地化が進んでいく。

なお、神戸川上流域にある三瓶山は、縄文前期後葉(BC3,550～3,650頃(4,780±100yBP))の第2ハイカ層(三瓶角井降下火山灰)降灰時と縄文後期前葉(BC2,025～2,145頃(3,600±75yBP))の第1ハイカ層(三瓶太平山火砕流・降下火山灰)降灰時の2回、大きな噴火があったことが分かっている(角田編1998、角田2019)。こうした噴火によって、火砕流堆積物が神戸川を流下して河口部に供給され、出雲平野が一層拡大したと推定されている(大西ほか1989、林1996など)。

遺跡分布をみると、前時期と比較して、各地で遺跡数が増加しており、特に古宍道湖南東沿岸および現大橋川の南側、「神門水海」沿岸付近に増加が窺える。現大橋川付近のように、古中海と古宍道湖という塩分濃度の異なる水域をテリトリーに含んだ場所は、漁撈対象となる水産資源の種類も多様化するため、縄文人の生業戦略上、有利に働いたことが推定できよう。

出雲平野中央部では、出雲市矢野遺跡・老丁田遺跡などが出現していることから、この時期の出雲平野拡大に伴い、当平野が人類活動の可能なより安定的な陸域になっていたことが窺える<sup>(2)</sup>。また、縄文後期における遺跡数の増加は、出雲地域臨海部だけでなく、出雲地域山間部の斐伊川・神戸川中上流域や石見全域でも認められる現象である(幡中2011a・b、会下2018)。こうした遺跡増加現象と海面低下から推定される気候の寒冷化との因果関係については今のところ不明だが、推測の域を出ないものの、例えば寒冷化によって、食料資源として有用なサケの生息圏が南下した

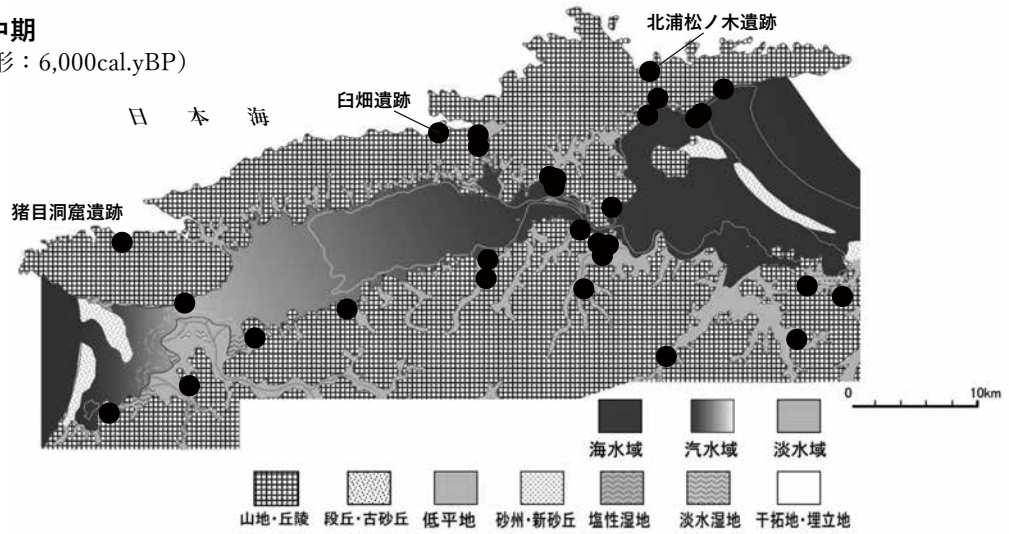
表9 宍道湖・中海周辺地域の縄文遺跡から出土した動物遺存体（各文献をもとに作成）

遺跡名	所在地	時期	哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類ほか			海獣・魚類ほか			貝類						文献					
			ニホンシカ	イノシシ	ニホンサル	イヌ	その他	クジラ目	タヌキ	ススキ属・ススキ	ナメス	その他	ヤマトシジミ	サザエ		アヒ	アカニシ	レイシガイ	ハマグリ	その他
菱根遺跡	出雲市 大社町	早期末～ 前期初頭	○	○	○	○			タイ・フグ類										酒詰・石部 1959	
西川津遺跡 (海崎地区)	松江市 西川津町	早期末～ 前期初頭	○	○	○	○			クロダイト類・マダイ・フグ科・エイ類	○								サルボウ?	高安 1987 昇上 1987	
佐太講武 貞塚		早期末～ 中期	○	○	○	○												ニシ	田中ほか 1962: p.19	
佐太講武 貞塚(1993 年度)	松江市 鹿島町	前期	○	○	○	○			サメ類・アカエイト類・イワシ類・クダイト類・コササギ科・ハゼ科・フナ科	○								ヒメコザラガイ・クボガイ・ベンケイガイ	内田 1994	
サルガ鼻 酒窟遺跡 (崎ヶ鼻洞窟遺跡)	松江市 美保関町	前期後半 後期末 葉	○	○	○	○			マダコ類・フグ科・サメ類・ボラ・アサギ・ウナギ・イサキ・クロコチ・コササギ	○								カリガネエガイ・イタヤガイ・シオボキ・サルボウ・アサリ・コシダカ・ガンガラ・ウグス・イボナ	直良 1937 直良・吉田 1939 金子 1963	
櫛理山河 窟遺跡	松江市 美保関町	後期																	サルボウ・カリガネエガイ・バカガイ・イボウ・シニシ	直良 1937
小浜洞窟 遺跡	松江市 美保関町	後葉 中期～ 前期中葉 晩葉 中生中 晩期	○	○	○	○			オツセルイ海獣・マダイ・サバ・ヒラメ科・コササギ科・コイ目	○									アサリ科・サラオガイ目・バカガイ目・マカガイ目・タボガキ科・イタボガキ科・イカガイ目・フナガイ目・オサガキ目・ヨシダカガイ目・オサガキ目・メトマツノガイ目	柳浦 2012
北浦松ノ 木遺跡	松江市 美保関町	中期後葉 後期初頭	○	○	○	○			アサリ科・サラオガイ目・バカガイ目・マカガイ目・タボガキ科・イタボガキ科・イカガイ目・フナガイ目・オサガキ目・ヨシダカガイ目・オサガキ目・メトマツノガイ目	○									石丸 2016	
麓II遺跡	出雲市 東箱西町	中期末～ 後期	○	○	○	○			アサリ科・サラオガイ目・バカガイ目・マカガイ目・タボガキ科・イタボガキ科・イカガイ目・フナガイ目・オサガキ目・ヨシダカガイ目・オサガキ目・メトマツノガイ目	○									石丸 2017a	
京田遺跡 3区	出雲市 湖陵町	後期	○	○	○	○			アサリ科・サラオガイ目・バカガイ目・マカガイ目・タボガキ科・イタボガキ科・イカガイ目・フナガイ目・オサガキ目・ヨシダカガイ目・オサガキ目・メトマツノガイ目	○									石丸 2017b	
京田遺跡 4区	出雲市 湖陵町	後期中葉 後期	○	○	○	○			アサリ科・サラオガイ目・バカガイ目・マカガイ目・タボガキ科・イタボガキ科・イカガイ目・フナガイ目・オサガキ目・ヨシダカガイ目・オサガキ目・メトマツノガイ目	○									石丸 2019	



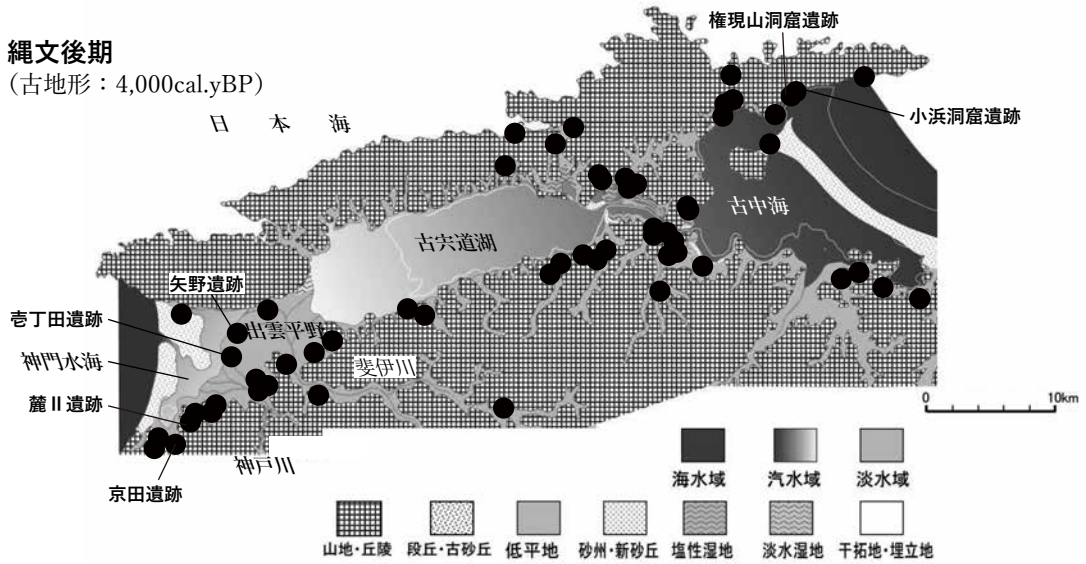
1. 後期中期

(古地形：6,000cal.yBP)



2. 縄文後期

(古地形：4,000cal.yBP)



3. 縄文晩期

(古地形：2,000cal.yBP)

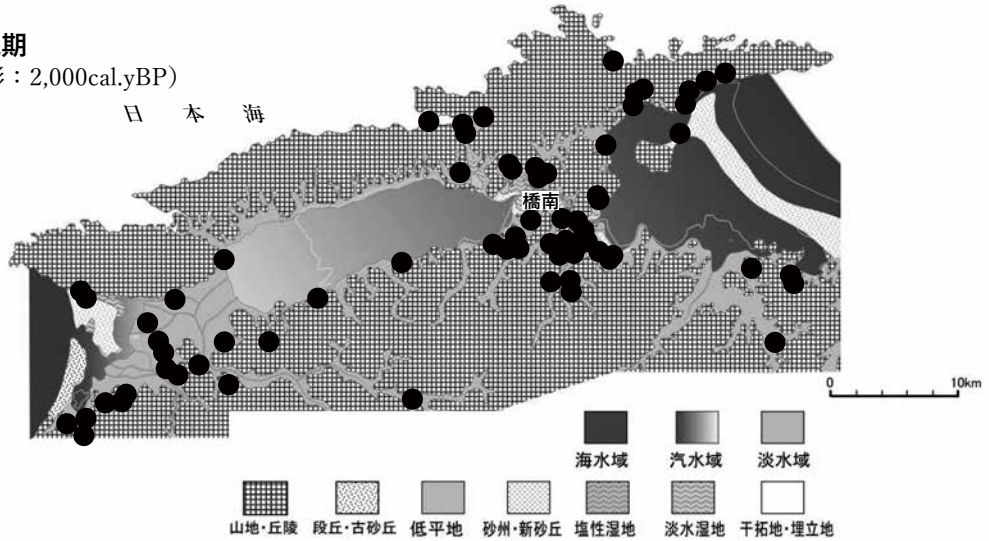


図9 遺跡分布図（縄文中期・後期・晩期）

地形復元図は高安 2019 を一部改変

といった生態系の変化が背景にあるのかもしれない。当該期の遺跡における動物遺存体の全容解明が、今後の課題となろう。

#### ⑥縄文晩期：約BC 1,300～BC 400? (図9-3)

特に、縄文晩期後葉の突帯文土器の時期における遺跡が多い。地域的には、特に松江市橋南地区で遺跡が増加しており、こうした遺跡からは、土掘り具と推定されている打製石斧の出土が多く認められている。打製石斧を、「菜園や雑穀などある程度の植物栽培」に利用された道具とみる説(柳浦2017: pp.174)を参考にすると、こうした石器組成の変化が示唆する当該期における何らかの生業の変革が、上記のような新たな場所での遺跡増加をもたらした可能性もあろう。

#### ⑦弥生前期：約BC 400?～BC 2世紀頃(図10-1)

弥生前期にはいると、上記した縄文後期以降の海退や河川沖積作用によって沿岸部に新たに形成された低湿地を利用して、水稻耕作が本格化したとみられる。特に出雲平野中央部では、神戸川および斐伊川の堆積活動によって形成された微高地上に遺跡が急増しており、その周辺に水田が営まれたと推定される。

#### ⑧弥生中期：BC 2世紀～BC 1世紀頃(図10-2)

前時期と比較すると、各地でさらに遺跡数が増加している。特に、出雲平野、松江市橋南地区、中海南東沿岸のほか、安来市の伯太川左岸側流域における遺跡増加が目立つ。出雲平野では、弥生中期中葉ないし後葉頃から出雲市古志本郷遺跡・同下古志遺跡・同天神遺跡などの環濠集落<sup>(3)</sup>が形成されている(米田2006など)。弥生中期後葉頃に始まる拠点集落としては、安来市永昌寺の谷遺跡、鳥取県南部町越敷山遺跡群、鳥取県米子市青木遺跡、鳥取県大山町妻木晩田遺跡など、出雲東部から伯耆西部の丘陵上や台地上においてもみられる(濱田2006など)。弥生中期後葉頃、人口増加に伴って、各地に拠点的な大型集落が成立していったことが分かる<sup>(4)</sup>。

また、宍道湖・中海・「神門水海」といったラグーン沿岸部や河川河口部に立地している遺跡の中には、鉄器・外来系土器など、交易によってもたらされた遺物が出土するケースが多い。こうした遺跡は、立地からみて、ラグーン内や日本海の水運、内陸への水運・陸運のターミナルとして機能していたと推定される。山陰地域では、特に弥生中期後葉以降、鉄器の出土遺跡が増加していることから(会下2019)、考古学的には、この時期以降、日本海における水運の一層の活発化が推定される<sup>(5)</sup>。遺跡の立地や発達を考えるうえで、縄文時代までは生業の観点からの説明が中心となっていたが、弥生時代以降は流通の観点からの説明も必要になってくるといえよう。

これに関連して、島根半島日本海側沿岸に立地する出雲市猪目洞窟遺跡では、出土した14号男性人骨が、九州北部との交流を示すゴホウラ貝製の腕輪を右腕に装着していた(大谷ほか1949、山本1972)。九州北部では、ゴホウラ貝製腕輪は男性右腕に装着するというルールがあり(木下1996: p.150)、島根半島のこの人骨もそれと同様であったことをふまえると、モノの移動だけでなく、より直接的で濃厚な情報伝達が伴っていたことが想像される。遺跡立地からみて外海での漁撈活動を基盤としたと思われる集団の一部が、水運による日本海遠距離交易にも従事していたことを推定させる事例といえよう。

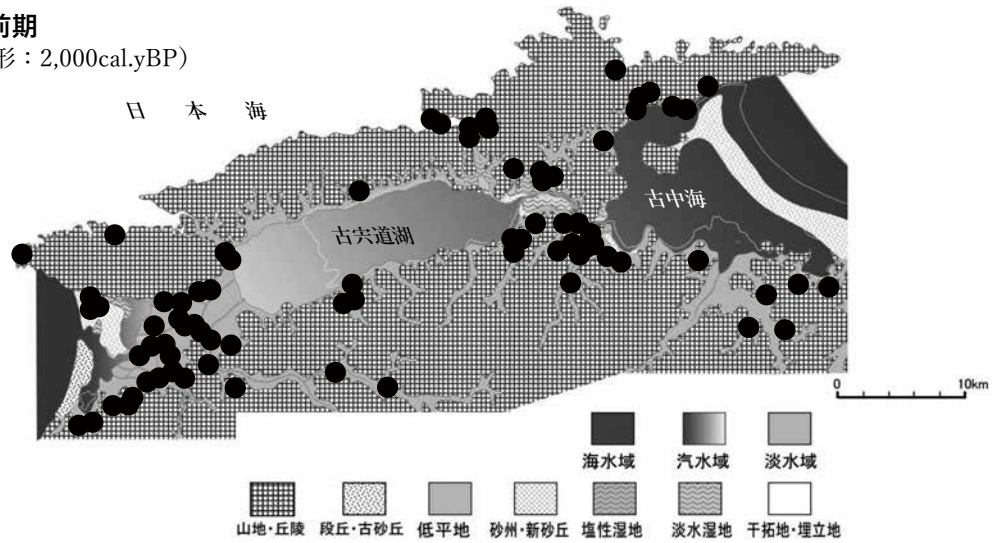
#### ⑨弥生後期～終末期：AD 1～3世紀前半頃(図10-3)

弥生後期前葉に一旦減少がみられるものの、地図上ではドットで埋め尽くされる程、後期・終末期を通じて各地でさらに遺跡が増加する。このことは、弥生後期中葉以降における一層の人口増加を想定させる。特に、宍道湖南沿岸、宍道湖北東沿岸、松江市八雲町の意宇川中流域で新たな遺跡が出現している。

島根半島では、大社湾や美保湾沿岸部で遺跡が点在するが<sup>(6)</sup>、日本海側沿岸部では松江市鹿島町以外では依然として希薄である。リアス式海岸地形のため可耕地が狭小なこの地域において、半農半漁的な生業を営んだと思われる集団の遺跡が本格的に増加するのは、古墳後期まで待たねばならない。

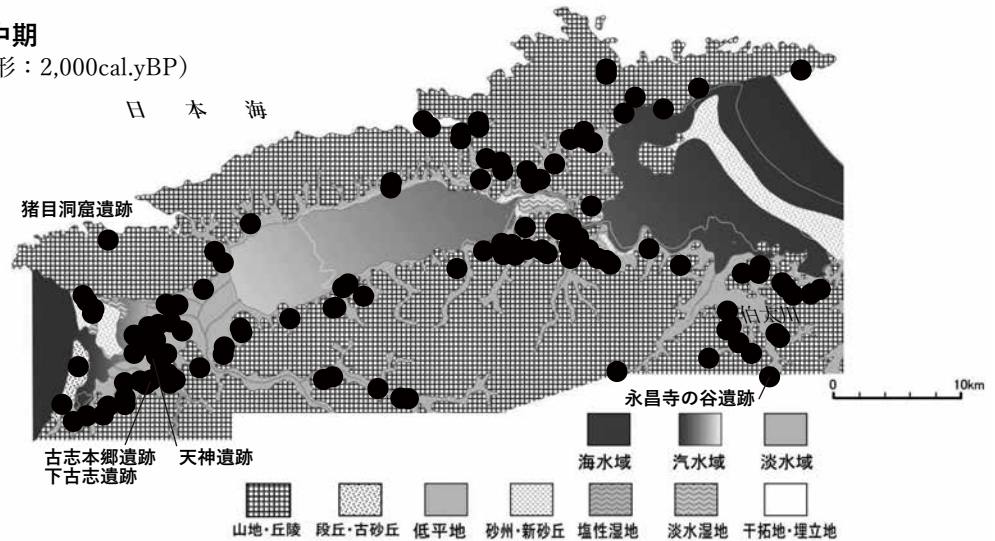
1. 弥生前期

(古地形：2,000cal.yBP)



2. 弥生中期

(古地形：2,000cal.yBP)



3. 弥生後期～終末期

(古地形：2,000cal.yBP)

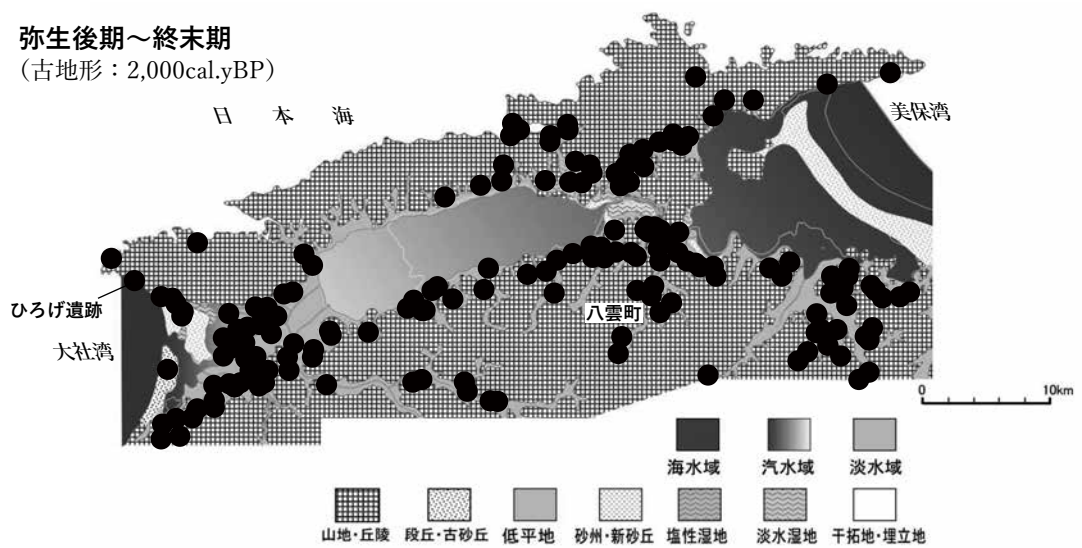


図 10 遺跡分布図 (弥生前期・中期・後期～終末期)

地形復元図は高安 2019 を一部改変



一方、上記した出雲平野の環濠集落、出雲東部・伯耆西部の丘陵上・台地上にある集落遺跡などは、弥生終末期ないし古墳前期前葉頃に総じて廃絶傾向にある（米田 2006 など）。この傾向の要因としては、洪水被害などのほか、推定の域を出ないものの疫病の流行による人口減少・集落廃棄の可能性なども考慮に入れておく必要がある<sup>(7)</sup>。

また、この時期は、宍道湖・中海周辺における大小の各平野に四隅突出型墳丘墓などの弥生墳丘墓が造営される。その様相からは、ある小地域ごとに、首長を輩出するような半ば自律的で階層化した集団が盤踞し、それらが結合ないし連帯してより上位の大集団を構成するといった社会構造の姿を想定することができる（会下 2015：pp.102-103）。こうした社会構造が形作られた根本的な背景には、これまでにみてきた過程を経て形成された、各水系流域の独立的な大小平野および、それらを水運で有機的に結びつける宍道湖・中海の存在というこの地域の地形環境が影響していよう。

### (3) まとめ

以上、後期旧石器時代から縄文時代・弥生時代における各時代・時期の遺跡分布を概観してきた。小稿では、古環境に対する人類活動適応の具体的復元という問題意識のもとに、マクロな視点から通覧したにすぎないが、土器細別型式レベルでみたより詳細な遺跡動向をまとめた研究もある（幡中 2011a・b、濱田 2006、米田 2006 など）。今後は、時期的、空間的によりミクロな視点からのこうした追究も求められよう。

また、遺跡動向の要因には、地域的、個別的なものがある一方で、広域的、普遍的なものもあるだろう。周辺地域や古墳時代以降の動向を包括した検討も今後の課題としたい。

#### 註

- (1) 縄文後期頃の海面低下は、鳥取県湯梨浜町東郷池の年縞堆積物の分析においても指摘されている。東郷池の年縞堆積物における菱鉄鉱量・全硫黄量の変動分析によれば、特に約 8,200～7,800cal.yBP（約 B C 6,250～B C 5,850、縄文早期後葉頃）、約 4,550～3,650cal.yBP（約 B C 2,550～B C 1,650、縄文後期頃）、約 2,000～1,900cal.yBP（約 B C 50～A D 50、弥生中期末～後期初頭頃）、約 1,300cal.yBP、約 500cal.yBP に顕著な海面低下、すなわち気候の寒冷化が認められるという（Kato et al. 1999）。
- (2) 中村唯史氏は、出雲平野中央部に位置する矢野遺跡が立地する微高地は、4,800yBP～4,000yBP 頃には汀線付近の環境となり、縄文後期中葉（3,600 ± 75yBP）の三瓶山火山活動イベントによって微高地の原形が形成されたと考えている（中村 2010）。今後は、出雲平野中央部における遺跡出土土器の増加を待って、出土土器細別型式の分布と、こうした地質学的な検討との両面から平野の形成過程を復元していく必要がある。
- (3) 出雲平野の神戸川左岸において環濠とみられてきた大溝については、すべてが環濠ではなく灌漑用の用排水溝である可能性が指摘されている（池淵 2019・2020）。いずれにしても、この時期から本格的な平野開発など人類活動の活発化が窺える。
- (4) 中四国の他地域においても、弥生中期後葉は遺跡数が増加する時期である。岡山県南部では、弥生中期後葉に遺跡数や竪穴住居跡数が激増し、弥生後期にはいと減少に転じるが、弥生後期後葉以降は再び増加し、古墳前期にはいと再び減少していく。四国でも遺跡数や竪穴住居跡数が、弥生中期末に増加している（川西 2015：pp.446-453）。弥生中期は、花粉分析や年縞の分析など、様々な古環境復元研究によって比較的温暖な気候が継続したと推定されている。上記のような遺跡増加から窺える弥生中期中葉から後葉における西日本での人口増加は、こうした気候条件に支えられたものだったとする指摘もある（今村・設楽 2011）。
- (5) 弥生中期中葉ないし後葉以降、益田市久城町専光寺脇遺跡を西限に、京都府京丹後市日吉ヶ丘遺跡などを東限にして、日本海沿岸や中国山地の三次盆地に方形貼石墓が分布するようになる。こうした墓制の分布も、日本海交流の活発化を背景の一つとしたものであろう。
- (6) 島根半島沿岸に点在する遺跡のうち、大社湾沿岸の狭小な谷部に立地しながら多量の土器出土をみた出雲市ひろげ遺跡は、弥生後期から奈良時代にかけて営まれた祭祀遺跡と推定されている（杉原・大槻ほか 1997）。こうした祭祀遺跡では、遺跡内から、あるいは遺跡周辺からの眺望・景観が、遺跡成立・立地の重要な要因となっている。遺跡立地の背景を考えるうえで、祭祀遺跡に限らず一般集落遺跡においても、こうした眺望・景観は考慮すべき要素となろう。あるいは当時、その集落に暮らした人々がどのような思いで周囲の景色を眺め、意



味づけていたのかということも遺跡を理解するうえで看過できない点である。

- (7) 例えば、鳥取市青谷上寺地遺跡 8 区 S D 38 における弥生後期中葉から後葉頃の埋土からは、結核患者にみられる脊椎カリエスの症状が現れた人骨が出土している（井上・松本 2002、Suzuki and Inoue 2007、鈴木 2015）。現代でも致死率が高い結核が、2 世紀頃にすでに大陸から山陰地域に伝播していたことを考古学的に示す事例である。

## 主要参考文献

- 池淵俊一 2019「出雲平野における 6・7 世紀の水利開発とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第 22 集 島根県古代文化センター pp.63-93
- 池淵俊一 2020「考古資料からみた出雲平野の水利開発－古志郷を中心に－」『前近代島根県域における環境と人間』島根県古代文化センター研究論集第 23 集 島根県古代文化センター pp.140-162
- 今村峯雄・設楽博己 2011「炭素 14 年代の記録から見た自然環境－弥生中期－」『弥生時代の考古学 3』同成社 pp.48-69
- 石丸恵利子 2016「北浦松ノ木遺跡出土の動物遺存体」『北浦松ノ木遺跡』松江市文化財調査報告書第 174 集 松江市スポーツ振興財団ほか pp.28-32
- 石丸恵利子 2017a「麓Ⅱ遺跡から出土した動物遺存体」『麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡（1 区）』一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 島根県教育委員会 pp.127-130
- 石丸恵利子 2017b「京田遺跡 3 区から出土した動物遺存体」『のの子谷横穴墓群・京田遺跡 3 区』一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 島根県教育委員会 pp.83-89
- 石丸恵利子 2019「京田遺跡 4 区の動物遺存体と縄文時代後晩期の動物資源利用」『京田遺跡 4 区』出雲市の文化財報告 39 出雲市教育委員会 pp.115-130
- 井上貴央・松本充香 2002「青谷上寺地遺跡から検出された人骨」『青谷上寺地遺跡 4』鳥取県教育文化財団調査報告書 74 鳥取県教育文化財団 pp.436-469
- 内田律雄・稲田陽介ほか 2011『苜捨古墳・西川津遺跡』主要地方道松江島根線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 島根県教育委員会
- 内田律雄・高安克己ほか 1987『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書（海崎地区 1）3』島根県土木部河川課・島根県教育委員会
- 内山純蔵 1994「出土動物・植物遺存体」『佐太講武貝塚発掘調査報告書 2』鹿島町教育委員会 pp.25-31
- 会下和宏 2006「『島根県遺跡データベース』の構築と運用」『情報考古学』vol.12-2 pp.1-11
- 会下和宏 2010「海況変遷と遺跡群③ 宍道湖・中海」『縄文時代の考古学 4』同成社 pp.66-75
- 会下和宏 2015『墓制の展開にみる弥生社会』同成社
- 会下和宏 2018「島根県中山間地域における文化財とミュージアム活動」『地域とつながる人文学の挑戦（山陰研究ブックレット 7）』今井出版 pp.69-91
- 会下和宏 2019「弥生時代の山陰地域における鉄器普及の様相」『山陰研究』第 12 号 pp.1-27
- 会下和宏・中村唯史ほか 1997『島根大学構内遺跡第 1 次調査（橋縄手地区 1）』島根大学埋蔵文化財調査研究センター
- 大谷従二・大國一雄・池田次郎 1949「出雲国猪目洞穴遺跡概報」『人類学雑誌』第 61 巻第 1 号 pp.1-6
- 大西郁夫・徳岡隆夫・高安克己・渡辺正巳・梶田秀児・日下智博・熊井克己 1989「出雲平野西部の形成過程」『古代出雲文化の展開過程に関する総合的研究－斐伊川下流域を中心として－』島根大学山陰地域研究総合センター pp.1-16
- 角田徳幸編 1998『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 5 島根県教育委員会ほか
- 角田徳幸 2019「三瓶山噴火災害」『季刊考古学』第 146 号 pp.30-33
- 金子浩昌 1963「美保湾・中ノ海の石器時代漁撈 島根県崎が鼻洞窟出土の魚類骨」『考古学研究』第 10 巻第 1 号 pp.38-41
- 川西宏幸 2015『脱進化の考古学』同成社
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究』法政大学出版局
- 小林謙一 2008「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学 2』同成社 pp.257-269
- 酒詰伸男・石部正志 1959「島根県菱根遺跡発掘報告」『同志社大学人文科学研究所紀要』第 2 号 pp.17-78

- 杉原清一・大梶智徳ほか 1997『ひろげ遺跡』大社町教育委員会
- 鈴木隆雄 2015「古病理学が語る病氣と障害」『The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine』52巻2号 pp.121-125
- 高安克己 2019「中海・宍道湖・出雲平野の形成」『松江市史・史料編1(自然環境)』松江市 pp.218-219
- 田中芳夫ほか 1962『鹿島町誌』鹿島町
- 直良信夫 1937「崎ヶ鼻第一号洞窟及び権現山洞窟の自然遺物」『考古学』第8巻10号 pp.476-479
- 中村唯史 2010「矢野遺跡の立地と古地理」『矢野遺跡 自然科学分析・考察編(第4分冊)』出雲市教育委員会ほか pp.1-5
- 幡中光輔 2011a「人間活動からみた島根県の縄文時代遺跡と地域社会」『古代文化研究』第19号 pp.1-49
- 幡中光輔 2011b「山陰地方山間部の縄文遺跡群と地域社会の変容—島根県志津見・尾原地区からの分析—」『島根考古学会』第28集 pp.1-24
- 濱田竜彦 2006「山陰地方における弥生時代集落の立地と動態—大山山麓・中海南東岸を中心に—」『古代文化』第58巻第2号 pp.82-95
- 林 正久 1996「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』第4号 pp.31-50
- 柳浦俊一 2012「松江市美保関町・小浜洞穴遺跡の出土遺物—島根大学考古学研究室所蔵遺物を中心に—」『古代文化研究』第20号 pp.45-76
- 柳浦俊一 2017『山陰地方における縄文文化の研究』雄山閣
- 山田和芳・高安克己 2007「地質コア解析に基づいた出雲平野の形成史」『出雲国風土記の研究III』島根県古文化センター調査研究報告書38 島根県古代文化センター pp.1-13
- 山本 清 1972「猪目洞窟遺物包含層について」『島根県文化財調査報告』第8集 島根県教育委員会 pp.59-86
- 米田美江子 2006「遺跡分布から見た出雲平野の形成史」『島根考古学会誌』第23集 pp.57-68
- Kato, M., Fukusawa, H., Yasuda, Y., and Fujiwara, O. 1999 Varved lacustrine sediments of lake Tougou-ike, western Japan with reference to holocene sea-level changes in Japan. Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University, 34, pp.25-38
- Suzuki, T., and Inoue, T. 2007 Earliest evidence of spinal tuberculosis from the Aneolithic Yayoi period in Japan. International Journal of Osteoarchaeology, 17, pp.392-402